

# 「沖縄 今も差別の犠牲」

## 横暴と悲劇語り継ぐ

### 元日本兵 70年目の思い

「沖縄は今も犠牲を強いられている」。日中戦争と沖縄戦を経験した元日本兵の近藤一さん(95)＝三重県桑名市＝は、中国人に働いた残虐行為や沖縄で死んだ戦友の姿を30年以上、証言し続けている。「二度と悲劇を繰り返すな、という戦友の願いを背負っている」。戦後70年、犠牲者への思いを語り継ぐ。 20150624



入院中の病室で、沖縄戦の体験を語る元日本兵の近藤一さん  
＝三重県桑名市(16日)

とがない。みんな悪者にされては戦友が報われない」との思いに突き動かされた。語り部活動を始めた後、沖縄県民から直接、沖縄戦での軍の暴虐ぶりを聞いた。衝撃と同時に思い出したのは、兵士が住民に向けた差別意識。米を食べる自分たちと違い、住民はイモを主食にしていた。また沖縄では、豚に人ぶりを食べさせる習慣を目にしたが、それは山西省でも見たことがあり、沖縄の人々と中国人が重なって見えた。「差別意識が軍の暴走につながったのか」と思い至った。

今も沖縄への差別は色濃いと感じている。「政府は基地問題で沖縄を犠牲にし続けている。政治家が戦争を始め、住民や兵隊に犠牲を強いた構造は全く変わっていない」空腹でふらつき死を覚悟していた45年6月末ごろ、一緒にいた兵士2人と声を上げ、銃剣を手に米兵に突撃し、捕らえられた。米兵は近藤さんの傷口に消毒液をかけ、水をくれた。日本軍が中国人捕虜にしたことと大違いだっただ。「なんて相手と戦ったのか」。近藤さんの戦争が終わった。中隊にいた約190人中、戦争を生き抜いたのは11人。戦後70年、近藤さん以外は鬼籍に入った。6月23日の「慰霊の日」は沖縄を訪れるようにしてきたが、今年体調が悪く、三重県から手を合わせたい。「私は明日死ぬかもしれない。でも、一つの史料として引き継いでほしい。それが私の生きる意味ですから」

米軍が沖縄本島に上陸した1945年4月、伍長として所属していた第62師団第13大隊第2中隊は、現在の米軍普天間飛行場(宜野湾市)近くにある高台に陣取った。すると、海を埋め尽くした米艦隊から、高台が変形するほどの艦砲射撃を受けた。手足や頭が吹き飛んだ無残な死体を山ほど見た。

中隊では、夜に兵士が銃剣と手りゅう弾を持ち、米軍幕舎に突撃しては散っていった。「こんな惨めな死に方はないよな」。長崎県出身の同年兵、長塚盛義伍長はそう言い残し、突進していった。目には涙が見えた。自らの残虐な行為も明かす。40年に20歳で陸軍に入り、中国山西省では中国人を銃剣で突く訓練をした。罪悪感は生まれなかった。中国人を並べて銃弾が何人を貫通するか試したこともある。上官から「中国人は豚以下だ」と言われ、差別意識が染み付いていた。

証言を始めた契機は、82年の教科書検定だった。沖縄戦での日本軍による住民虐殺の